

第1章 プロジェクトの概要

久保田賢一 阿部潔 是永論 大國充彦

1. はじめに

コンピュータの利用方法が、ネットワークにつながれることで変化してきている。これまでコンピュータは、ワープロや表計算など文章編集や集計などの作業を行うための便利な道具（ツール）として利用されてきた。ワープロや表計算のソフトを利用することで、手書きでは時間がかかっていた編集が自在になったり、簡単に集計、検索、並べ替えなどができ、時間が大幅に節約できるようになった。そして、コンピュータがネットワークに接続されたことで、利用範囲は、このような道具的な利用からさらに発展し、さまざまな情報を受け取ったり、情報を発信したりできるコミュニケーションのためのメディアへと変わってきた。実際、ここ数年の間にインターネットのプロバイダーが林立し、利用する人の数は飛躍的に増大した。（このような急速に伸びてきたインターネットをコミュニケーションのメディアとして、人々は実際にどのように利用しているのだろうか、それが本プロジェクトの基本テーマである。）

インターネットの利用環境は、大学においても充実してきた。情報教育やコンピュータ利用のための実習が行われ、学生たちも個人のアドレスを持ち、電子メールやネットニュースなどを利用できるようになってきた。大学でのコンピュータ利用も技術計算処理からWWWサーバーにアクセスした情報検索や電子メール交換などに重点が移ってきた。このようなコンピュータ・ネットワーク環境の充実により、多くの学生たちは友人たちと電子メールによるコミュニケーションをとるようになってきた。しかし、これらのコミュニケーションは互いに知っているもの同士が連絡を取り合うためのものあり、携帯電話やポケベルの延長線上にある「閉じた」グループ内でのコミュニケーションと言える。インターネットの特徴の一つは、外に「開かれた」コミュニケーションを持てることにある。しかしながら、キャンパスという枠を超えて、外の世界とのコミュニケーションを押し進めるような方向でネットワークを利用している学生はそれほど多くはない。キャンパスの外側のこれまで会ったことのない人たちとコミュニケーションをすることは、異質な世界に触れ、さまざまな思考や価値観があることを知り、また理解するための第一歩となるかもしれない。このようなインターネットの長所を生かした、外の世界と大学の学生との間にコミュニケーションが成立するのであるだろうか。本プロジェクトは、キャンパスの枠を超え、他大学との学生同士がネットワークを介して交流を図ることで、

この点を浮き彫りにしようと試みた。

本プロジェクトの活動は、関西大学と札幌学院大学の学生間の電子メール交換（1996年春・秋学期）およびビデオ会議による交流である。本プロジェクトに先立ち、1995年秋学期に関西大学とハワイとの間で学生間のメール交換およびビデオ会議を行った¹⁾。ハワイ側はハワイ大学とウィンドワード・コミュニティ・カレッジの学生が参加し、関西大学の学生と18グループ作り、グループ内で電子メールの交換を行った。最初に自己紹介のメールを交換したあと、学生たちは自由にメール交換を2カ月半ほど行い、プロジェクトの最後にビデオ会議をもった。

学生たちのメール交流は、最初の自己紹介で終わってしまうものから、ほぼ毎日のようにメール交換したもてまで大きなばらつきがあった。この交流に参加した学生は、電子メールでの「話題」をつなげていく難しさを指摘し、それがコミュニケーションを続けるための障害になったと語っていた。話題を見つけることの難しさの要因として、対面的なコミュニケーションを行っていないため、交流の相手がどのような人であるか想像するのが難しいことがあげられる。また、電子メールは「文字情報」のみの交流のため、相手の考え方や微妙な心の動きを読みとることができないもどかしさがある。このような相手の「身体性の欠如」が、強く「相手に対する配慮」となり、失礼な言葉を使ったり、相手を傷つけないように過度に言葉遣いに対する配慮が見られた。その結果、話題のつなげ方がぎこちなくなり、交流が途絶えてしまうようであった。このようなことがおきる原因として、交流相手がアメリカ人であるという点と英語を使用しているコミュニケーションである点が考えられた。もし、このような点が原因であるとするならば、日本人同士の交流はよりスムーズに行くかどうか、確かめる必要があるだろう。

以上のような前回のまとめをもとに、大学間の交流を日本人同士に限定して行った。関西大学と札幌学院大学とのメール交流プロジェクトは、前回よりも規模を拡大し、自己紹介の印刷物から始めて相手を自由に選ぶ交流グループ、課題を設定しまとめあげるための交流グループ、テーマを設定しメーリングリストで話し合いを行うグループなど参加者をいくつかのグループに分けて、コミュニケーションの違いや電子メールのやりとりについて分析した。

2. 情報教育の現状

プロジェクトに参加した学生たちの生活のなかにどの程度コンピュータが入り込んでいるのだろうか、まず知る必要がある。今回のメール交流プロジェクトに参加した学生たちは、札幌学院大学社会情報学部と関西大学総合情報学部²⁾に所属している。二つの学部は「情報」という名前の付いた学部として、それぞれ92年、94年に新しく発足したばかりである。両学部の共通の教育内容の特徴として、文系・

1. 久保田賢一、阿部潔、Diane Masuo、Jean Hanna (1996) インターネットを利用したコミュニケーション：電子メールとビデオ会議を利用したハワイとの交流活動、『情報研究』第5号 p.41-65

理系両方のカリキュラムを備え、コンピュータ教育と語学教育の強化があげられる。

参加した学生たちのインターネット利用状況と両学部の情報教育カリキュラムとの間には強い相関関係があると考えられる。まず、両学部の情報教育と学生たちのコンピュータ利用状況について概略する。

2.1 札幌学院大学社会情報学部の情報教育

札幌学院大における電子メールの利用環境としては、学部実験室（以下実験室）にあるコンピュータ 30 台とゼミの教室として利用した調査実習室（以下実習室）のコンピュータ 4 台のみであった。これらの機種はすべてインターネットへの接続が可能であり、通常は授業等と重ならない限りは基本的に自由に使用できた。なお、この他に一般の情報処理等で使用され、かつ学生が自由に利用できるコンピュータが約 270 台あり、これらは大学の計算機センターの下にネットワーク化されていたが、学外との接続や、学内での電子メール利用等も一切不可能であった（以下ではこのコンピュータをセンター端末という）。

札幌学院大学側の課題遂行グループ参加者は、3 年次までに情報処理とプログラミング言語・演習という形でいずれもコンピュータ自体には触れる機会があったが、コンピュータは全てセンター端末であり、機種やシステム全てが今回電子メール利用に使用されたものと異なるものであった。利用経験としても学外でコンピュータを利用する経験はほとんどなく、学内でも週に 1 回以下が大勢を占めていた。したがって、今回の活動によって始めて電子メールを経験するものが全員であった。

電子メールの利用にあたっては、札幌学院大側は Eudra-J というソフトを全員に使用させたが、設定の問題や使用経験の不足から送り先を間違ったり、メーリングリストではなく、個人だけに送信するようなケースが多く発生し、交流が円滑に進まなくなる原因ともなった。しかしながら、ソフトの利用に関しては技術的な難しさを指摘するものは少なかった。

2.2 関西大学総合情報学部の情報教育

本学部の情報教育では、1、2 年次に必修科目として「情報処理」、「情報管理」があり、それらの科目に対応した「基本ソフトウェア実習」、「応用ソフトウェア実習」がある。コンピュータと関連した実習科目は選択として、「プログラミング実習」、「制作実習（オーディオ、プリント、ビジュアル、広告、編集）」、「コンピュータ・グラフィック実習」、「応用シミュレーション実習」、「法情報処理」、「政治情報処理」、「経済情報処理」、「経営情報処理」、「知識情報処理」などさまざまな実習が用意されている。

学生は 1 年次の最初に、キーボード操作の基本であるタッチ・タイピングを学び、キーボード入力に慣れることが求められる。さらに図書検索、電子メール、電子ニュース、文書作成、ファイル転送、統計処理などの基本的なウィンドウ、UNIX の操作を習熟する。2 年次の実習では、エクセルを使った統計処理、インターネット

のWWWページ作成を始め、Cプログラミングの基礎を学ぶ。

電子メールやネットニュースは1年次で学習するが、実際に日常的に電子メールを利用している学生は全体の1割ほどである。また、ネットニュースを授業で利用している教員も数名程度であり、その授業では学生は課題としてネットニュースに投稿して利用する程度である。そのほかには、ごく少数の関心の高い学生が投稿しているに留まっている。

学生が、学校外の人と電子メールの交換をするためには、事前に届け出て許可をもらう必要がある。そのため海外や他大学に友人がいて、電子メールでやりとりをしたいという学生以外はあまり利用していないのが現状である。コンピュータ操作に関し、1年次に基本的なことを学んでいるが、週に1回の実習だけでは、学生にとっては、理屈が理解できないまま、操作の仕方を手順に従って行っているだけに終わってしまう。

本プロジェクトに参加した学生たちも、学校に学外発信の申請書を出しているものは少なく、プロジェクトをきっかけに申請をしたものが多かった。友人同士の間でもメール交換をしていなかった学生が大部分であった。

学生は、UNIXのMuleというエディターを使って電子メールのやりとりをするが、UNIX独特の初心者にはめんどろな操作があるため、慣れるまで時間がかかる。ただし、日常的に利用するようになった学生にとっては、問題はない。本プロジェクトに参加した学生も次第に操作になれ、問題なく利用できるようになった。

3. メール交換プロジェクト

3.1 電子メールを用いた「自由記述グループ」

3.1.1. 交流活動の概要

1996年4月から7月にかけて、関西大学総合情報学部と札幌学院大学社会情報学部との間で、電子メールを用いた大学間交流活動を実施した。参加者は、関西大学から10名（男性3名、女性7名）、札幌学院大学から13名（男性6名、女性7名）の合計23名であった。交流の手順としては、電子メールを交換する前に、参加者全員がそれぞれ作成した「自己PR文書」を提出させ、大学ごとにひとまとめにして互いに郵送し、相手校の参加者の「自己PR文書」を閲覧した。こうした手続きを取った理由は、事前に相手に対する何らの情報も持っていないと、電子メールでの交流を開始するに際して、多くの参加者が戸惑いを感じる事が、過去の同様の交流活動を通じて明らかになったからである。「自己PR文書」には、「氏名、メールアドレス、自分の写真またはイラスト、プロジェクト参加動機、自己アピール」について記すことのみ指示を与え、その他の記載内容と形式の詳細については、各人の自由に任せた。このような「自己PR文書」の交換を済ませたうえで、参加者各人に自由にメール交換を始めさせた（5月の第一週）。メールを交換する相手、

ならびにその人数については何らの制限も加えず、各人の判断に任せた。こうした方法を取った理由は、以前のプロジェクトでは予めこちら側でメールパートナーを決めて交流を開始させるスタイルを取ったので、そこで得られた諸知見との比較を行なえるようにするためである。交流期間中に、各大学において隔週のペースで会合を開き、メール交換の進捗状況や生じたトラブル等について報告を受けた。また、メール交換を進めていくうえで気がついた点や感じたことなどについて、参加者の間で議論を交した。関西大学側の参加者は、多くが大学での実習授業等を通じて電子メールの送り方について既に知っていたため、テクニカルな面でのトラブルはほとんど報告されなかった。札幌学院大側の参加者についても、今回のプロジェクトと並行する形で大学のゼミ等で電子メールを利用するものが多く、それ以外でもゼミ担当教官の研究室等で日頃からパソコンの操作などについて慣れ親しんでいるものもあるなど、総じてテクニカルな面でトラブルを訴えるものは見られなかった。

メール交換を用いた交流の形式や内容に関わる問題としては、最初の話の手掛かりを見つけることが困難であることや、自分の方からメールを送ったのに相手から返事が届かないことに対する疑問や失望が、両大学において何人かの参加者から報告された。全体としてメール交換は概ね順調に進み、積極的な参加者の場合には、複数のパートナーとの間で一日に一通程度のメールの交換が行なわれた。およそ二カ月にわたるメール交換の最後に、インターネットを利用したテレビ会議を開催した。テレビ会議は課題グループの場合と同様に両校とも個人の研究室の設備を利用して行った。ソフトは CUSeeMe を利用したが、音声がよく聞き取れないため、電話を利用して画面を見ながら話すことにしたが、札幌学院大では一人しか対応ができなかったのに対し、関西大では複数の人が同時に話せるシステムがあったため、結果的に多対一のやりとりとなった。事後のメール交換では話題にはなったが、特に交流上に果たした機能は少ないように思われた。

以上のような交流活動の過程で得られたデータ・資料は以下のとおりである。

- 1) 電子メールとインターネットの利用に関する事前・事後アンケート
- 2) 関西と北海道に関するイメージの事前・事後アンケート
- 3) コンピュータに対する態度の事前・事後のアンケート
- 4) 電子メールの記録（学生間（一部）、教員間、学生と教員）
- 5) 活動終了時の学生の感想
- 6) ビデオ会議の記録（録画）
- 7) 会合における討論内容の記録
- 8) インフォーマルなインタビュー

3.1.2. 電子メール交換の内実

個人のメール記録は、本人の許諾が得られた場合に限りデータとして収集した。得られたデータから判断する限り、メール交換を開始する際に、「自己PR文書」などから得られた情報をもとに、互いに相手と自分との接点（共通の趣味など）を

見つけ出そうとする傾向が見られた。またその際に、相手の気分を害したり失礼なことを言わないようにとの「配慮」が為されていた。こうした初期段階をクリアし、互いの話題がある程度共有されることが判明された後には、メールの交換は比較的規則的かつ順調に進展していく傾向が見られた。

メールを通じての話しの内容としては、日常的話題（大学での出来事やアルバイト先での話し）が多くを占め、互いの地域の違いについての話や、個人的な深刻な悩みなどはあまり見られなかった。他大学の学生とのメールを通じたやり取りが、それぞれ自分の大学で日常的に接している友達とのコミュニケーションと相同のものとして意識されていることが、定期的な会合の場での発言や事後のインタビューによって確認された。

また、事後アンケートでの感想やインタビューから、多くの参加者が、メール交換の内容そのものではなく、メールをやり取りすること自体に「楽しさ」や「面白さ」を感じていることが、伺い知れた。つまり、何か有用な情報内容を伝達／交換することではなく、電子メールというメディアを介して互いにコミュニケーションを交すこと自体に、参加者の多くは意義を見い出していたのである。

3.1.3. 電子メールを用いた交流活動の効用

プロジェクト準備段階では、互いに遠くはなれた場所にいる学生同士が電子メールのやり取りをすることで、互いの地域性についての相互理解が深まるのではないかと期待されたが、相手地域に対するイメージについて質問した事前・事後アンケートの結果から判断するかぎり、全体として見た場合にそのような地域認識の変化は生じなかった。このことは、ここでの交流活動が、その内容において何らの課題も与えず、参加者の自由意思に任せたためであると思われる（課題遂行グループとの比較）。他方、多くの参加者がメール交換すること自体に価値を見い出し、日常的にコンピュータに接するようになったことは、コンピュータ利用を大学カリキュラム内での課題に終わらせることなく、学生たちにコンピュータを日常的な道具として利用させるという目的に鑑みれば、大いに教育的効果を発揮したと思われる。他大学の学生とメールを交換するという「目的」が明確になることによって、学生たちは教員側から促されたり、授業の一環だからという義務観からではなく、自主的・主体的にコンピュータ機器に接するようになったと思われる。

3.2 課題遂行グループ

3.2.1 交流活動の概要

課題遂行グループには、関西大学総合情報学部から、久保田ゼミの3年次の学生20名（男性3名、女性17名）札幌学院大学社会情報学部から、是永ゼミの3年次の学生20名（男性18名、女性2名）が参加した。

活動期間としては、双方の学期間中として1996年5月から開始し、その後の継続

期間は特に定めなかったが、実質は7月の学期とともに終了した。

課題遂行グループの目的は、大阪と札幌という地域性を題材にできるようなテーマ設定を行い、そのテーマについて話し合いや討論を持ち、最終的にテーマに沿ったまとめを行うというものであった。交流開始に先立ち、4月にまず、討論の課題の設定とグループ分けをおこなった。

札幌学院大学側が電子メールの利用方法を学んでいる間、関西大学側の学生が希望するテーマ別にグループが生まれ、電子メールを使ってその課題が札幌学院大側に送られ、札幌学院大側の各学生が希望を出し、グループを形成するという形式で決定された。テーマと各グループの人員配置は以下の通りである。

テーマ	関西大	札幌学院大	合計
a) アフタースクールの生活	4名	4名	8名
b) 冠婚葬祭	3名	4名	7名
c) 観光に関する問題	4名	4名	8名
d) 食べ物・イメージ	5名	4名	9名
e) ことばの違い	4名	4名	8名

なお、札幌学院大側では当初c)に希望が集中し、逆にb)やe)を希望するのは少なく、3グループの間で調整を行なった。

活動開始に先立ち、両校ともにグループごとに「自己PR文書」を作成し、郵送により交換した。自己紹介の内容については特に制限をつけず、様式も本人に任せる形で作成した。関西大学側の文書にはグループごとにあらかじめ討論内容についてまとめられたものが添付された。自己紹介の内容については、関西大学側の紹介には、ほぼ本人の写真が添付されており、また自己のプロフィールに加えて学問的な関心内容にも触れるものが多かったが、札幌学院大側では写真を添付したものは少なく、自己紹介も非常に簡略なものにとどまるものが多かった。また、札幌学院大学では相手からの自己PRや文書にまとめられた討論内容に対する理解が不十分なところが見られた。

関西大学側は、グループ分けをした後グループ別の会合をゼミの時間以外に持ち、それぞれのテーマに従いどのような交流ができるか話し合った。ゼミの時間はグループの会合で話し合ったことについて簡単な報告会を行ったり、相手校との問題点の調整などの時間として活用した。札幌学院大側の活動時間は、授業時間が中心となったが、両校のゼミの曜日が異なるため、ゼミ時間としての活動回数には大きな差が生じた。特に札幌学院大側は連休と重なったために実質の活動開始時期は5月13日以降になった。

電子メールの利用に際しては、技術的な指導を行なったほかは、内容については基本的に教員側が介入することはなかった。札幌学院大側では後述するように利用時間がほぼ授業時間のみだったため、結果的にはどのようなメールを送付するか

ついて教員側が相談を受ける場合が見られた。

この交流活動の記録として、以下のようなデータが収集された。

- 1) 電子メールとインターネットの利用に関する事前・事後アンケート
- 2) 関西と北海道に関するイメージの事前・事後アンケート
- 3) コンピュータに対する態度の事前・事後のアンケート
- 4) 電子メールの記録（学生間、教員間、学生と教員）
- 5) 活動終了時の学生の感想
- 6) ビデオ会議の記録（録画）
- 7) ゼミにおける討論内容の記録
- 8) インフォーマルなインタビュー

3.2.2. 電子メール交換の実態

グループごとにテーマが設定され、相手校と共通のテーマに沿っての活動を行うという意識のためか、関西大学側では主にグループの話し合いが行われた後、代表が話し合いの結果をまとめて送るという傾向が見られた。実際に電子メールを利用する時間は、関西大学側では主に授業の空き時間が利用されていたのに対し、札幌学院側は4名が昼休み等を利用して以外にはほぼ全員が授業時間を中心にメールを利用していた。したがって、交流の頻度も実質には週1回以上にはならなかった。

メール交換の実態は、ゼミの活動のあり方とも深く関係してくる。関西大学側では、4月上旬にゼミ合宿を開き、最初のゼミ内の交流を図った。さらに、5月下旬のオープンキャンパス⁽²⁾に模擬店を出す準備をしていたため、ゼミ生同士の親密度は急速に高くなってきた。また、6月には電子メールのテーマにあわせて、各グループでディベートを行ったので、テーマに関する文献を調査し、理解を深めることができた。さらに、夏休みのフィリピン・ゼミ旅行の準備とゼミ活動が大学生生活の中心におかれ、ゼミの時間以外にも頻繁に学生同士は集まり活動を続けた。このような活動を助けたのが、ゼミのメーリングリストである。それぞれの活動の進行状況は、電子メールのメーリングリストを利用して送られ、毎日5から10通程度のメールが送られていた。そのため、学生たちは学校へ来る日にはほとんど大学のコンピュータを使い自分のメールをチェックする習慣がつくようになった。しかしながら、札幌学院大との各グループのメール交換は、話し合いの結果をまとめて代表者が送ることが多かったため、どのようなプロセスを経て結論に達したかが、相手には伝わらなかった。たとえば、札幌学院側にアンケートなどの実施を求めても、相手側は何のためのアンケート調査なのか十分に理解をすることができず、誤解を生む結果にもなった。このようなコミュニケーションの行き違いが課題遂行の意欲減退となって現れてしまった。

2. 一般市民向けに大学を開放し、学生たちの出店やサークルの発表などを行うフェスティバル

札幌学院大側では、メール交換はグループを基本単位としていたが、実際の書き手は特定の人物に集中することが多かった。特定のメンバーにメール書きを任せて、自分は他のことをしているという場合も少なからず見られ、また、メンバーがほとんど初対面であったため、グループ内でも意志の疎通がはかられず、同じグループのメンバーに対する遠慮からなかなかメールが出せないというケースもあった。同じような状況はアンケートなどメールによって生じる作業にも見られ、特定のメンバーに作業が集中する傾向が多くあった。

次に、各グループごとにメール交換の実態について簡単に述べる。なお、交流メール数はメーリングリスト等における判明分のみをカウントしているため、実数はそれよりも多い場合がある。

a) アフタースクールの生活

このグループでは、学外での生活をテーマに、関西大から7通、札幌学院大から6通の計13通のメール交換が行われた。内容としては自己紹介の他に参加者個人の課外生活について報告がされた後、関西大の班からアルバイトや遊び、習い事といったことについてのアンケートが出され、それについて両校の学生を対象に調査をし、結果を比較するということが行われた。アンケートの交換後の議論が期待されたが、結果の交換でちょうど交流期限が切れるという結果となった。

b) 冠婚葬祭

このグループでは、冠婚葬祭といった慣習の違いをテーマに、関西大から10通、札幌学院大から21通の計31通のメール交換が行われた。内容としては自己紹介の後、結婚の習慣についてのやりとりがあった後、関西大の班から結婚の習慣についてのアンケートが出された。調査結果については札幌学院大が送付したのものをもとに関西大が違いを比較する予定であったが、データの交換がなされる前に期限が終了した。

c) 観光に関する問題

このグループでは、観光に関する問題として特にアイヌに関する問題をテーマに関西大から14通、札幌学院大から7通の計21通のメール交換が行なわれた。このグループに関してのみ、札幌学院大学は各個人でメールを送るのではなく、グループ全員で話し合いながらメールを作成して送付するという形式がとられた。内容については、アイヌ問題を取り上げることについて議論がなされた後、アイヌに関するイメージのアンケートが両校でなされた。結果については双方で交換されたが、札幌学院の結果が一部のメンバーにしか届かなかったこともあり、全員でそれをもとに討議するには至らなかった。

d) 食べ物・イメージ

このグループでは、食べ物や土地のイメージをテーマに、関西大から 28 通、札幌学院大から 30 通の計 61 通のメール交換が行われた。内容については、自己紹介の後、食べ物について中心的にやりとりが行われ、北海道と大阪のそれぞれの食べ物とイメージについてのアンケートが関西大の班から出され、両校で実施された。結果が交換され、個人的には感想も出されたが、それが全体的な議論として発展する前に期限が終了した。

e) ことばの違い

このグループでは、ことばの違いをテーマに、関西大から 7 通、札幌学院大 8 通の計 15 通のメール交換が行われた。内容については、自己紹介がかなり遅い時期に行われたこともあり、すぐにことばについてのアンケートが関西大の案を元に両校において作成され、実施された。内容が複雑であったこともあり、結果が郵送による交換になったため、双方で結果を確認する前に期限が終了する結果となった。

学生自身の意識としては、札幌学院大学側では、あまり積極的に参加できなかった層では、課題自体が親しみにくいものであったことを指摘するものが多かった。しかしながら、かなり積極的にメールを送ったと思われる層においては、「おもしろい」という認知はされていたものの、メールを送る時間がとれず、関西大側が毎日送ってくるという状況もあって、相手側に気後れを感じたという感想も見られ、課題そのものよりはメールを使う時間の不足を指摘する声が多かった。

3.2.4. ビデオ会議

6 月 24 日の札幌学院大側の授業時間中を使ってビデオ会議が予定されていた。両校とも個人の研究室の設備を利用していた。ソフトは CUSeeMe を利用したが、事前の調整において音声がよく聞き取れないことが分かったため、音声は電話を利用し、映像はインターネット通して画面を見ながら話すことにした。

当日は両校からゼミの参加者全員が出席した。しかしながら、札幌学院側のマシントラブルにより、ネットワーク接続ができず、その時は原因も不明であったため（事後にケーブルの接触不良であったことが判明した）、結局は音声のみによる会話となった。関西大学側はスピーカーとマイクを利用したためグループで同時に音声を聞き、発言することができたが、札幌学院大側は携帯電話を使用したため 1 人しか対話をすることができなかった。事前に多くメールを交換していたものは比較的话题に困らなかったが、一人が話している間は他の者は待機しなければならず、また同じような話題を一人一人に対して繰り返さなければならなかったため、会話としてはあまり進展する機会がなかった。

しかしながら、事後のメール交換において、相手の声について話題にするなど、今まで個人として認識することがなかったものが、一人一人を認識するきっかけとしての役割をもつ場合があった。

3.3 メーリングリストを用いた自由討論グループ

(Aグループ：「私の恋愛観」、Bグループ：「怖い話」)

3.3.1. 交流活動の概要

1996年10月下旬から12月下旬にかけて、メーリングリストを利用した自由討論による交流活動を実施した。その際に、前回の電子メールを用いた交流活動(3.1.参照)の継続参加者からなるAグループと、新規参加者からなるBグループの二つを設けた。その理由は、事前に知り合っているもの同士かそうでないかの違いが、メーリングリストを用いた交流の在り方に影響を与えるか否かを調べるためである。Aグループの参加者は、関西大学側から6名(男性2名、女性4名)、札幌学院大学側から6名(男性4名、女性2名)の、合計12名であった。Bグループの参加者は、関西大学側から7名(男性2名、女性5名)、札幌学院大学側から5名(男性2名、女性3名)の、合計12名であった。交流の手順としては、まずそれぞれのグループごとに教員側からテーマを与え、それについて各人が自己紹介を含めて最初の投稿をすることを義務付けた。参加者全員の一通りのメール投稿が終了したうえで、その後は各人の自由な書き込みに任せた。討論テーマについては、学生たちに共通に関心を持たれるものと考えて、Aグループについては「私の恋愛観」とした。Bグループについては、最初「怖い話」をテーマとして設定したが、途中で複数の参加者からテーマ変更の要望が出されたので、「私の友人観」に変更した。

各大学において、AグループとBグループ合同で、隔週に一度の会合を開催し、活動を進めていくうえで生じたトラブルや気が付いた点などについて意見交換した。技術的問題については、メーリングリストの仕組みが十分に理解できていない学生がおり、メーリングリスト宛ではなく個人宛に返事を書いてしまうものが見られたので、そうした技術的問題の解決を図った。

内容的・形式的問題としては、一対一の電子メールとは異なる一対多のコミュニケーションであるメーリングリストで発言するときに、他のコミュニケーション場面では見られない色々な戸惑いを感じる事が報告された。交流活動開始当初は、自己紹介を交えたメールの投稿が見られたが、各人が一通り自分の意見を述べてからは、予想された程には活発な議論は交されなかった。交流活動の最後に、インターネットを利用した会議を行なった。会議では初めて両校の人間が複数で同時に話せるシステムが利用されたが、やはり音声としては聞き取りにくく、かえって会話の進行が妨げられることが多かった。

以上のような交流活動の過程で得られたデータ・資料は以下のとおりである。

- 1) 電子メールとインターネットの利用に関する事前・事後アンケート
- 2) 関西と北海道に関するイメージの事前・事後アンケート
- 3) コンピュータに対する態度の事前・事後のアンケート

- 4) 電子メールの記録（メーリングリストに投稿されたもの全て）
- 5) 会合における討論内容の記録
- 6) インフォーマルなインタビュー

3.3.2. メーリングリスト利用の内実

交流期間中に投稿されたメールの量は、Aグループについては57通、Bグループについては38通であった。開始当初は、以前から互いに知り合っているということもあり、Aグループでのメールのやり取りが盛んであったが、やがて終息していった。どちらのグループにおいても、与えられたテーマについて各人が自分の意見を一通り述べたのを受けて、それに繋げて別の人が意見を展開していくということが必ずしも円滑に行なわれなかった。また、発言者は一部の参加者に限定されがちであった。またその発言内容も、各人が自分の意見の言い放しで終わってしまう傾向が見られた。何人かの参加者は、定期的な会合の折に、各人が色々と自分の意見を述べるので、「今、何が中心的に話題になっているのか」を把握することが困難であることを報告していた。こうした感想に現われているように、メーリングリストを用いて各人が自説を開陳していく過程で、全体としての議論が拡散していく傾向が観察された。こうした傾向は特にBグループに強く、お互いをよく知らないどうしではなおさら適切な話題が出せないということで、二重の困難が生じたように思われる。しかしながら、Aグループに参加していたものからは、すでに相手のイメージがつかめているので、同じ話題に対するいろいろな関心の違いがよく分かって面白いという感想もインタビューでは聞かれた。ただ、逆に話題がメールと似通った身近なものであったために、わざわざメーリングリストで同じ話題をすることへのモチベーションが見いだせなかった点もあり、結果として話題が継続されなかったと思われる。

このような議論の拡散状況に直面して、誰かが「議論の整理」をする必要が、参加者によるメーリングリストへの投稿や会合の場で指摘されたが、結果的に誰もその任を果たすことなく、交流期間は時間の経過とともに終息していつてしまった。前回の電子メールを用いた交流活動の場合と比較して言えることは、個人対個人のやり取りではなく、一対特定多数のやり取りであるメーリングリストでは、相手とメール交換すること自体の「面白み」や「楽しみ」が、それほど感じられなかったように思われる。このことは、とりわけ前回からの継続参加者からなるAグループのメンバーに指摘できる。例えば、電子メールを利用した交流活動では合計71回の発進をした女子学生は、今回のメーリングリストを利用した交流活動では、わずか4回しか投稿していなかった。

また、一対特定多数の情報のやり取りという、他にはあまり見られないメーリングリスト特有のコミュニケーション形態のために、どのような会話モード（話しかけのモード）をそこで取るべきかについて困惑することを、何人かの参加者は会合の場などで報告していた。

以上の二点（メール交換自体の「面白み」の欠如、「話しかけのモード」の不明瞭さ）が、結果的に、ここでの交流が期待されたほど円滑には為されなかったことの原因であることは、交流活動終了後に出された感想文やインタビューからも確認される。

3.3.3. メーリングリストを利用した交流活動の効用

メーリングリストを利用しての交流活動は、Aグループ、Bグループ共に、期待されたほどには活発になされなかった。その理由としては、メーリングリストのメディア特性として、効率的な情報伝達には優れているが、議論のポイントを整理して、特定の話題について集合的に考えを深めていくための手段としては必ずしも有効ではないことを挙げる事が出来よう。つまり、何らの課題も設定せずに、参加者の自由な討論に任せる場合には、メーリングリストは適した手段とは言えないのではないだろうか。最初に設定したテーマについて、各人が色々な意見を述べて行く過程で議論が拡散してしまう場合でも、システムオペレーターのような中心を持たないメーリングリストでは、それまでの議論を整理し、ある特定の方向へと導いていく動きは、自生的には生じにくいように思われた。